

優しく強い子に！



大人ならどなたでも、子どもたちの今と未来の幸せを願っているものだと思いますが、皆様と協力して子どもたちの今と未来に関わる仕事・活動をしている私は、



由井三 作品展

これからの日本がどうなっていくのかととても気になっています。四季折々の自然が豊かで、美しく平和な国がどうなっていくのだろうか、子どもたちに手渡すことができるだろうかと心配になる昨今です。“戦後70年ではなく、今や戦前だ”という声も聞こえてきます。

<http://www.minamih.net/>
18・11・23 (金)
南NEWS no 96

アジアの人々2000万人、日本人310万の命が奪われたという先の大戦。多くの人の尊い命を犠牲にすることによってようやく手にすることができた平和憲法。それを変えようとする人達があります。歴史にしっかりと学び、同じ過ちを繰り返したくありませんね。次の文章を思い出しました。



日本図書館協会選定図書 シリーズ「子どもたちの未来のために」

井上ひさしの「子どもにつたえる日本国憲法」

絵 いわさき ちひろ 講談社

はじめに



由井三 作品展

「兵士となって戦場へ行くのか、防衛戦士として本土で戦うのか、それはわからないが、とにかく二十歳前後というのが、きみたちの寿命だ」。ところがあの8月15日を境に、なにもかも変わった。「きみたちは30、40まで生きていいのです」というのですから、頭の上から重しがとれたようで、しばらく呆としていました。この状態を大人たちは「開放感」というコトバで言いあらわしておりましたが。その呆とした気持ちがシャンとなったのは、敗戦の翌年、日本国憲法が公布されたときです。

いまでは信じられないことですが、昭和20(1945)年の日本人男性の平均寿命は、たしか23.9歳でした。戦地では兵士たちが戦って死ぬ(あとでわかったのですが、戦死者の3分の2が餓死でした)、内地では空襲で焼かれて死ぬ、病気になれば薬がないので助かる命が助からぬ、栄養不足の母親を持った幼児たちは栄養失調で死ぬ、そこで大勢が若死にしたのです。女性の平均寿命も、37.5歳だったはずです。

そんな時代ですから、私たち国民学校生徒も先生たちから、「きみたちも長くは生きられないだろう」と言い聞かされていました。



由井三 作品展

「きみたちは長くは生きられまい」と悲しそうにしていた先生が、こんどはとても朗らかな口調で「これから先の生きていく目安が、すべてこの百と三の条文に書いてあります」とおっしゃった。とりわけ、日本はもう二度と戦争で自分の言い分を通すことはしないという覚悟に、身体がふるえてきました。

二度と武器では戦わない。……これは途方もない生き方ではないか。勇気のいる生き方ではないか。日本刀をかざして敵陣へ斬り込むより、もっと雄々しい生き方ではないか。度胸もいるし、知恵もいるし、とても難しい生き方ではないか。そのころの私たちは、ほとんどの剣豪伝を誦んじていましたが、武芸の名人達人たちがいつもきまって山中に隠れたり、政治を志したりする理由が、これでわかった思いました。剣よりも強いものがあって、それは戦わずに生きること。このことを剣豪たちはその生涯の後半で知るが、いま、私たちはそれと同じ境地にたっている。なんて誇らしくて、いい気分だろう。



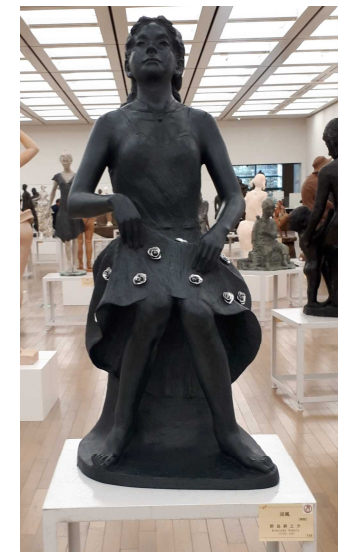
由井三 作品展

この子どもの時の誇らしくていい気分を、なんとかしていまの子どもたちにも分けてあげたいと思って、私はこの本を手がけました。

井上 ひさし



日展・少年連盟前々委員長の作品



日展・家内の叔父の作品



日展・鈴木英子さんの作品

鈴木さん(神奈川)は、フランスの画家アンリ・ルソー(1844～1910)ピカソに高く評価され、同時代のゴッガンにも注目されていた)の作品のモチーフ・画風にそっくりの絵を描く画家です。好きな画家で、毎年のお会いを楽しみにしています。

